

# やまと 民俗への招待

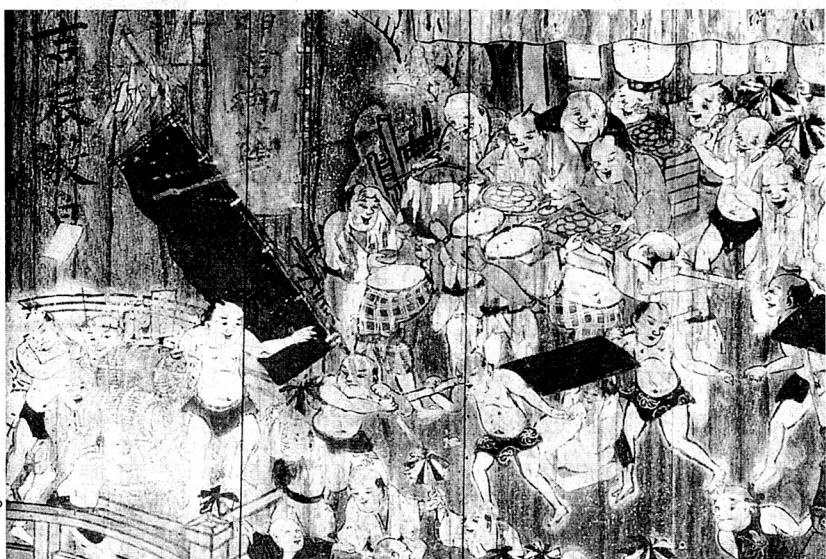
鹿谷勲

おかげ参りは江戸時代、およそ60年に一度大流行した。なかでも最も大規模だったのが、文政13（1830）年に四国阿波から各地に波及したもので、実に500万人の参宮者があったといわれる。この時、参宮する人々の通り道となつた奈良盆地の横大路村（現大和高田市）の人々が、伊勢へ向かう人々を接待した様子を描いた珍しい絵馬が、同市龍王宮（石園座<sup>せきおんざ</sup>、多久虫玉神社）に奉納されていた（1990年、放火により焼失）。

高田を東西に貫く横大路は伊勢に通じる街道の一つで、道沿いの人々は、無料で食べ物などを支給する「施行」<sup>せぎゆう</sup>をした。総120・7メートル、横17メートル・4メートルの大きな画面に、横大路を舞台に徒步で伊勢に向かう人々とこれを歓待する人々が描かれ、活気に満ちた様子が

画面中央の上部には草葺きの家が描かれ、その両側には「天照皇太神宮御蔭」の幟が高々と掲げられている。右側からは、笠を被った大勢の道者（参宮者）が押し寄せている。右の大幟の下には「御墓施行」の額があり、下に葉の包み紙が積みしてある。柄杓を差し出して葉を受け取っている者もいる。草鞋を人々に与える光景も描かれ、その場で履き替えている男もいる。

軒先に短い暖簾を張り巡らした家では、身を垂り出して三昧線を弾く女と、そばで太鼓を叩く人が描かれている。頬被りしている男の手拭いには、「げ」の文字が残っている。おそらく「おかげ



おかげ参りを接待する

放火による焼失前の絵馬（部分） 筆者撮影

まさに木橋を渡って車に積んだ米俵を運び入れようとする神姿の男たちが描かれている。そばでは子供たちがシデを振りながら迎え入れている。来る者、迎える者、多くの人々が描かれた画面全体から、200年近く前の人々の明るく活気に満ちた姿が、地元の絵師・和田桃景の絵筆で見事に捉えられている。

大勢の伊勢参宮者が押し寄せた大和では、各地に施行所を設けて、組織的に参宮を援助していく。た。橿原市八木でも、当時の灯籠や関係史料が伝わり、施行所の跡はいまもセンタイベ（接待場）と呼び習わされている。伊勢に参宮する人々を扶<sup>すく</sup>ることによって、自らも遠隔地のお伊勢さんの